

大平総理の思想

新井俊三

イタリーの商法学者「モツサ」の愛用句に「コントロ・ベント、コン・ベント」(風に向かつて、風とともに)という言葉があります。この言葉は大平さんが尊敬しておられた同郷の先輩、米谷隆三氏(一橋大学の教授であり、モツサの弟子に当たる)の著書の巻頭にも掲げられていた一句であります。

何かの雑談の折に、大平さんがこの言葉にふれて、「いい言葉だったなあ」と感想を述べられたことがあります。つまり、大平さんのお考えは、時に世論に抗して毅然と自説を貫き、時に世論の動きを洞察して同調するなどの、弾力性を持つことだということでしょう。

細川総理は「世論は風、自分は帆、国家は船」だとの譬えをしておられるが、もし大平総理在世ならば、風に対して時には逆らい、時に随うという政治家独特の見識も大事だよと、後輩に注文されたに違いないと思っております。

夢に終わった広い書齋

大平さんが亡くなったあとで大平未亡人が何かのときに、「大平は常盤先生を非常に尊敬していました。が、ことに常盤先生の広い書齋を羨ましがって、自分も書齋だけはああいう広いのが欲しいと言っていました。そこで、火事で焼けたあと、いまの家を新築するときに、初めは大平の希望通り広い書齋を設計

したのですが、段々と、あちらを削りこちらを削っているうちに、ついつい書齋にも手がついてしまって、結局、狭いものになってしまいました。今から思うと、大平の夢であった広い書齋だけは残せばよかったと思っております」という思い出話がありました。

この度、大平さんの追憶について何か書いて欲しいとのご注文でしたが、大抵のことは多くの方々によりまして、殆ど語り尽されている感もあります。しかし、大平さんが亡くなってから十年余も経つたいま、大平さんの思想について、私自身がしみじみと思ひめぐらしていることを、重複を顧みず若干、記してみたいと思います。

「政治の限界」を説く凹的な思想

大平さんは、「政治の限界」ということをよく言われておりました。とかく世間では、専門家になるほど、例えば政治家であれば政治のオールマイティーを主張します。経済人であれば経済のオールマイティーを主張しがちであります。しかし大平さんは、常に強い調子で「政治の限界」ということを説いておられました。

これは非常に勇気ある発言で、限界を主張されることは「分をわきまえている」ということであります。そして、こういう人こそが、自分の言行に責任を感じているわけであります。

いまは世を挙げて政治の改革に熱を上げております。とかく政治はオールマイティーであるかの如き錯覚を世人に与え、逆に社会は、政治に無いものなだりをする。大平さんは、「政治の力」には限界がある。「一隅を照らす」という言葉があるが、政治は一隅を照らすにすぎない。政治、経済、文化等、みんな力を合わせて、世の中を良くするように努力するのだと、はっきりと考えておられました。

それで、我々の会合に出席されたときにも、大平さんは仲間の注文に「タタ合点しながらも、「しかし皆さん、政治に過度な期待をしないで下さい」と、よく言われたものです。「その代わり、政治でなければ出来ない分野がある。それについては一〇〇パーセントの責任を持ちますよ」というのが、いつもの大平さんの姿勢でありました。

思想には、いわば「凸思想」と「凹思想」ともいうべきものがあります。凸とはプラス的であるし、凹はマイナス的である。しかし、殊に東洋思想では、このプラス、マイナスは一体表裏をなし、表面的、形式的には、時には凸であり、時には凹の表現を示す。しかし、実は「無即有 有即無」ということであります。

大平さんの好んで口にされた言葉に、「一利を興すは 一害を除くに如かず」（耶律楚材）があります。これもやはり凹的な思想で、大平さんがお元気であられるならば、恐らくハブルも政治面から相当チエックされたのではないかと思っております。

老荘の境地とフランスのエスプリ

なお、大平さんは四書五経に通じておられました。思想的には（特に晩年は）老荘の境地であつたと思われます。

現在の日本思想は、古来の神道に、日本化された仏教と儒教が渾然と融和して、それに明治維新以来の西洋合理主義が加味されたものと私は考えておりますが、大平さんの思想には、それが巧まらずして体现されていたように思われます。

古神道の精神は「清明心」で表現されますが、大平さんの、心境は常に「清明心」を心掛けておられま

した。また、神前に玉串を捧げる神官の姿、腰を屈し、目線を低くするを「跼蹐」と表現しますが、大平さんの姿には自然そのような印象を受けたものです。

大平さんの「永遠のいま」の思想は、直接的には田辺哲学の「歴史的現実」にありとこ本人が言っておられますが、田辺哲学は西田哲学の流れを汲み、その源流は道元の正法眼蔵あるいは親鸞の思想であり、日本の仏教の精髓に触れていると思われれます。

大平さんは昭和十一年の東京商大卒業であります。その年の卒業アルバムに、三浦学長の送別の辞が載っております。(露木清氏『大平正芳回想録 追想篇』より)

その最後の一句に、「言ひ古した詞ではあるが、人生は千古の謎である。謎なればこそ是を解かんず勇猛心も発生す可く、苦しい間の楽しみも味い得るであらう。門出の今は若い同志で青春を語る可きで蹉陀たる老人の繰言を聞く時ではない。強てとならば、吾は只『居之無倦 行之以忠』の古語を引いて、口ゴスを『行為』と訳したファウストの決心を学べといはむ」と。

この三浦先生の短い言葉の中に、日本が明治維新以来、必死に積み上げてきた近代西洋思想と、古来の日本思想との融和が盛られておるが、大平さんの思想にはそうしたニュアンスが完全に盛られており、亡くなった現在でも若々しい精気を発散しているわけであります。

ジスカール・デスタン仏大統領が、「大平さんはフランスのエスプリが分かっている」と評したそうですが、正しく大平思想の本質を表現したものと云ってよいでしょう。

(株)国際関係基礎研究所取締役社長